

氏名(本籍地)	瀬戸山 聡子(東京都)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第64号		
学位授与年月日	平成25年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	現代日本女性の中年期危機に対するソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力の効果		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	藤崎 春代
	(副査)	昭和女子大学教授	掛川 典子
		昭和女子大学教授	鵜養 啓子
		白梅学園大学教授	無藤 隆

論文審査結果の要旨

申請者は、修士論文研究以来一貫して中年期女性に焦点を当てて研究を行うとともに、臨床心理士として成人を対象とした心理臨床にも携わっている。本論文は、心理臨床に携わる者としての問題意識を背景に、知覚されたソーシャル・サポートと自分の容姿を維持向上する努力が女性の中年期危機に及ぼす予防・軽減効果についてのモデル構築を目的としたものである。本論文の独自性は、以下の4点にまとめることができる。

第一に、中年期危機の予防・低減要因として容姿を維持向上する努力に着目し、研究の俎上に載せた点である。容姿を維持向上する努力については、心理臨床実践において対象者のアセスメントを行う際に注目される側面であるにもかかわらず、実証的に検討されることはなかった。容姿維持向上努力尺度を作成することにより、容姿維持向上に向けての取組みの個人差を測定することを可能にしたことの意義は大きい。さらに、容姿を維持向上する努力は、当事者としてもまた介入者としても比較的取り組みやすいものであり、これが中年期危機を低減するというモデルが構築できたことは、臨床的にも意義あるものと言える。

第二は、中年期の時期区分について丁寧に検討した点である。人生の時期区分は、心理学研究者においても、一致した見解があるわけではない。どのような視点から区分するかにより、異なる時期区分がなされている。同様のことは、研究者でない人が行う時期区分についてもあてはまるであろう。この点について、申請者は、中年期女性のみでなく青年期女性も対象として検討するとともに、中年期女性には世間一般と自分自身についてたずねることにより検討した。中年期に該当する年齢について、世代間のみならず、中年期女性自身が世間一般と自分自身との間にもズレをかかえているとの知見と、それらについ

て具体的な年齢を提示したことは、今後の中年期研究に基礎的資料を提供したといえる。

第三は、家族状況の違いによって異なるモデルを構築したことである。従来、ライフスタイルの違いにより、中年期危機やその予防・低減要因が異なるであろうことは心理臨床的には指摘されてきたものの、量的研究において実証されることはまれであった。この点について、家族状況の観点からライフスタイルを類型化して、既婚・子有り群と未婚・子無し群とでは異なるモデルとなることを示した点は高く評価できる。

第四は、論文全体にわたって、多様な側面から丁寧かつ詳細な検討を行っている点である。研究方法としても、質問紙調査を中心としながら、面接調査も組み合わせることで中年期女性の実態を掘り上げることに留意している。こうしたことにより、先行研究の指摘が実証的に追試されると同時に、現代日本の中年期女性の特徴が抽出されている。

しかしながら、以下のような問題点もある。

そのひとつは、既婚・子無し群と離／死別・子有り群においてモデル構築ができなかったことである。この理由としては、これら2群の該当者人数が少なかったことと、媒介変数が自尊心以外のものである可能性があることによると思われる。妥当な媒介変数を検討することも含めた理論仮説の再検討が必要であろう。

ふたつめには、個人の類型化にあたって、本論文では家族状況に着目したが、ライフスタイルを規定する要因としては、この他にも就労状況・経済状況・学歴といったデモグラフィック要因、パーソナリティなどの心理的要因が考えられる。今後、さらなる先行研究の精査、臨床的経験の蓄積をもとに、どのような要因に着目することが必要であるのかの検討を継続することを期待したい。

以上、問題点も考慮したうえで、現代日本女性の中年期のとらえ方に基礎的資料を提供していること、女性の中年期危機に対する知覚されたソーシャル・サポートと容姿を維持向上する努力の効果について、丁寧な資料収集と分析を積み重ねて、理論的にも、心理臨床実践への示唆としても意義深い知見が得られていることから、審査者一同、博士論文としての価値が十分あるとの判断で一致した。